



Title	卑罵語ヤガル（アガル）の用法の拡張について
Author(s)	西谷, 龍二
Citation	語文. 2022, 119, p. 77-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95251
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

卑罵語ヤガル（アガル）の用法の拡張について

西 谷 龍 二

1 はじめに

現代日本語には、聞き手や第三者をさげすんだり、罵ったりする際に用いる卑罵語のヤガルがある。ヤガルは次の(1a)に示すように、主語に対する見下げ・罵りを表す機能（主語下位待遇）があると言及されてきた。また主語を下位待遇する用法以外に、(1b)のように話者が事態を悪く捉えている、あるいは、事態に対する悪感情を示す用法もあると述べられてきた（菊地1997）。

(1) a. (仕事もしないのに) あいつが飯を食いやがった (作例)

b. 壁にかかっていた絵が社長の頭の上に落ちやがった。(いい気味だ。)

(菊地1997: 40)

このヤガルは複合動詞後項のアガル（上がる）が卑語化し、変化したものと考えられている（松尾1936、吉田1971など）。この近世期のアガル・ヤガルについては現代と異なり、主語下位待遇の用法のみで、事態に対する悪感情を示す用法が歴史的に派生してきたという考えが示されている（澤田2017など）。ただし、歴史的な記述は十分ではなく、実証的に示されているわけではない。そこで本稿では、ヤガルの歴史的な実態を明らかにし、事態に対する悪感情を示す用法が主語下位待遇の用法から歴史的に生じたという仮説を検証する。

以下、本稿の構成を示す。2節では、ヤガルの先行研究を参照し、ヤガルの用法に関する議論を中心に整理し、問題点を述べる。3節では調査方法、および調査する資料について述べる。4節では、近世後期から近代におけるヤガルの使用実態を記述し、近代以降に用法の拡張が見られることを示す。5節は変化の過程について解釈を述べる。6節はまとめである。

2 ヤガルについての先行説とその問題

2.1 ヤガルに関する先行研究

ヤガルの先行研究について確認していく。ヤガルは卑罵語として敬語・待遇表現

研究や、個々の時代の言語記述等で言及がなされ、話手以外の主語を卑下する、罵る等といった記述が行われてきた（松尾 1936、湯澤 1957 など）。また菊地（1997）は、ヤガルが主語に対してだけでなく、事態に対しても用いられる場合があると指摘した。ただし、菊地（1997）は、ヤガルを中心に考察したものではないため、用法の指摘にとどまる。ヤガルの研究として重要なのが澤田（2017）である。澤田（2017）は様々な観点からヤガルについて考察している。澤田（2017）のうち、本稿に関わるものとして、①アガルの卑語化の過程、②ヤガルに 2 つの構文を認め、それに対応する用法が存在すること、③歴史的なアガル・ヤガルの実態という 3 点について要約し、まとめておく。

まずアガルに卑罵語の意味が生じた点について述べる。アガルの卑語的意味は、中古以降に見られる「平常心や慎みを失い（興奮して）、動作が度を越して激しくなる」意」（澤田 2017：170）を表す複合動詞後項の用法が基となり、⁽¹⁾他者の度を越した動作に対して話者の卑語的感情が会話的推移として生じ、慣習化したため生じたと主張する。⁽²⁾

次に構文と用法の面について述べる。現代語のヤガルは、以下の（2）に示しているような A 型と、B 型という 2 つの構文が存在し、それぞれコントロール構文と繰り上げ構文に対応すると述べる。また歴史的に A 型から B 型に拡張したという仮説を示している（「i」は同一指示性を、「PRO」は音形のない主語を、「…」は補文の動詞が取りうる格成分を意味している）。

（2） a. A 型「～やがる」：[X ガ i [PRO i … V] ヤガル]

b. B 型「～やがる」：[[X ガ … V] ヤガル]

（澤田 2017：150）

この構造の違いによって、A 型と B 型には機能・用法に違いが生じると述べる。A 型は「主語の意図的行為に対する話し手の悪感情（忌々しさ、等）を述べると同時に、主語を蔑む（見下げる）主語下位待遇機能」（澤田 2017：152）を持つ。一方、B 型は事象全体に対する話し手の悪感情を表すもので、主語下位待遇機能は認められないという違いが存在すると指摘する。

最後に歴史的な状況について述べる。澤田（2017）は、卑罵語としてのアガル（ヤガル）が見られるようになる近世期の状況を述べており、近世期のアガル・ヤガルは、基本的には A 型のみであるとし、A 型から B 型へ拡張したという自身の説を補強している。⁽³⁾

以上から、澤田（2017）によれば、主語下位待遇機能の用法がアガルに生じ、その後、統語的な変化等とともに事態に対する話し手の悪感情を示す用法が歴史的に

派生したと考えられる。しかし、澤田（2017）のA型とB型の区分には問題と見られる面もあり、検討が必要である。また近世期以降のヤガルの記述は従来、ほとんど行われていない。そのため、歴史的資料においてB型とされている例やその拡張の様相は未だ示されておらず、A型からB型という変化は実証されてはいない。このような歴史的変化が実際に見られるのか、また見られるのであればその変化の様相を明らかにする必要がある。そこで、本稿では、ヤガルの拡張について、その使用実態を記述し、A型からB型が派生したという仮説を検証していく。以下では、まずA型とB型の問題について指摘し、本稿における代案を示す。

2.2 A型とB型の特徴と問題

澤田（2017）は、A型とB型の2つの構文の特徴について前接動詞、主語、および動作主指向的な副詞の生起を挙げている。A型は、「話者の意図的行為」に対する話者の悪感情を述べるため、主語は「意図性を持つ動作主」という制限が存在する。そのため、前接動詞は意図性のある動詞が生起することになる。また動作主（主語）に対する話し手の非難・憎しみを表す動作主指向的な文副詞（「よくも・生意気にも」等）の共起が可能と指摘する。一方、B型は、「事態に対する悪感情」を示すため、主語は動作主以外でもよいとし（無主語文でも可能⁽⁴⁾）、非行為動詞が生起すると述べる。またB型では、動作主指向的な文副詞が生起できないという（「*雨がよくも／生意気にも降りやがる」）。

このような特徴を持つA型とB型であるが、その分類には問題と考えられる面も存在する。それは「主語下位待遇」という機能が「意図性の有無」と結び付けられている点である。澤田（2017）の主張するアガルの卑語化の過程を踏まえると、卑語的意味が焼き付いていく過程において、前接動詞が意図的な動詞に限られていた可能性は高い。しかし、「主語下位待遇」という機能と「行為の意図性」とは本来独立した概念と考えられる。そのため、意図性の有無とは関係なく、主語を下位待遇する（見下げる）ことも可能ではないだろうか。例えば、「大人になる・成長する」や「現れる」は意図的な行為とは考えにくい、「よくも・生意気にも」等の主語を非難する副詞は生起できる。

- (3) a. (?) お前は生意気にも大人になりやがったな／成長しやがったな
b. お前、よくも俺の前に現れやがったな。

したがって、「ヤガル」の用法を考える上では、A型とB型という捉え方では、説明できない用法が存在する。

2.3 分類の試案

そこで本稿では次のような分類を提案したい（それぞれの特徴は以下の表 1 にまとめた）。まずアガルの卑語の意味が他者の意図性のある行為から生じた点を踏まえると、主語下位待遇の機能を持ち、意図性のある動詞を前接させるタイプが考えられる。主語には意図的な行為を行う動作主を取る。これを仮に $\alpha 1$ タイプとしておく。

次に意図性のある行為ではないが、主語下位待遇の機能を示すタイプがある。これを $\alpha 2$ タイプと呼んでおく。意図性のある行為ではないため、主語は動作主以外を取り、変化の主体や状態の持ち主などが当てはまる（便宜上、「非動作主」と記す）。 α タイプは主語下位待遇の機能を持つが、下位待遇する主語に対して引き起こされる事態あるいは主語の状態等に対する悪感情は必然的に含意されていると考えられる。そのため、 α タイプは機能として、主語下位待遇（見下げ）に加え事態に対する悪感情も示す。これらは聞き手と第三者のどちらにも用いられる。

一方、主語下位待遇の機能がなく、事態に対する悪感情を示すタイプがある。これを β タイプとしておく。基本的に主語下位待遇（見下げ）は有情物に対して行われるものであり、非情物に対して見下げを示すことは性質上、難しい。したがって、そのような機能を持たない β タイプには非情物も出現しうる。そのため、 β タイプには有情物と非情物の両方が主語となる可能性がある。これらも主語に非動作主を取り、非意図的な動詞が前接する。便宜上、有情物を $\beta 1$ 、非情物を $\beta 2$ としておく。 β タイプは人称として三人称が基本と考えられる。ヤガルを聞き手である二人称者に用いる場合、事態に対する悪感情のみを表すとは解釈しにくいためである。

ここで問題となるのが、 $\alpha 2$ と $\beta 1$ である。両者は、機能として主語下位待遇を持つか、あるいは事態に対する悪感情のみを表すかという点で異なる。 α タイプは主語下位待遇の機能を持つため、マイナスの人称表現である「貴様」等の代名詞や「ーめ」等の接尾辞が共起しても問題ないが、 β タイプの場合は、主語に対する見下げはないため、代名詞や接辞といったマイナスの人称表現は機能の面で共起しえない。人称表現は $\alpha 2$ の認定には有効だが、三人称かつ人称表現が共起しないものについては、 $\alpha 2$ か $\beta 1$ か外形から判断することは困難である。そこで、人称表現等があり、明確に $\alpha 2$ と認められるものを除き、三人称かつ人称表現が共起しないものを、「 $\alpha 2 \cdot \beta 1$ 」のように 1 つにまとめて扱うことにする。

以上を踏まえ、本稿では、ヤガルの変化の実態について調査し、 α タイプから β タイプへの変化が見られるのかという点を検証していく。

表 1 タイプ分けの試案

タイプ分け	$\alpha 1$	$\alpha 2$	$\beta 1$	$\beta 2$
機能	主語下位待遇 事態への悪感情	主語下位待遇 事態への悪感情	事態への悪感情	事態への悪感情
前接動詞	意図的・行為	非意図・非行為	非意図・非行為	非意図・非行為
主語の特徴	有情物 動作主	有情物 非動作主	有情物 非動作主	非情物 非動作主
人称	二人称・三人称	二人称・三人称	三人称	三人称
人称表現	共起可能	共起可能	共起不可	共起不可

3 調査方法と調査資料

次に調査方法と調査資料について見ていく。2 節で確認したようにヤガルの用法は、前接動詞の意図性、主語、人称、人称表現等と関係すると考えられる。まず前接動詞であるが、一般的に他動詞は動作主を主語に取り、目的語となる対象などに影響を与えるものであるため、他動詞は $\alpha 1$ に分類ができると考えられる。本稿では、他動詞を「名詞＋ヲ」という形式の補足語（益岡・田窪1992：12）を取るものとし、これ以外を自動詞とする。ただし、経路等を表すもの（「この通りを進む」など）は自動詞とする。自動詞に関しては、動作主の意志的な動作を表す自動詞（「歩く・行く」など）と、非意志・意図性のないものがある（「できる・落ちる」等）。意図性のあるものは $\alpha 1$ であり、非意図性のものは、人称や接辞等から $\alpha 2$ か、 $\alpha 2 \cdot \beta 1$ かを判断する。非情物は $\beta 2$ として分類する。

本稿では、主に「動詞連用形＋ヤガル（アガル）」に分析対象を限定して進めていく。近世期にはヤガルの語形として「アガル・ヤアガル・ヤガル」という形が湯澤（1957）などで指摘されているため、この 3 つの語形を対象にした。実際のヤガルの用例にはヴォイスの助動詞である「(サ)セル・(ラ)レル」やテ形補助動詞等にも接続する例が見られるが、これらは前接動詞とそれに後接する補助動詞全体の性質を考える必要などがあり、意図性とも関わる場合があるなど、議論が煩雑になってしまうため、本稿では対象外とした⁽⁵⁾。

次に調査資料に関して述べる。まず近世前期以前は卑罵語自体が殆ど現れず、近世期になって見られることが知られている（山崎 1963）。近世前期のアガル・ヤガルについては近世前期の口語資料である近松の世話浄瑠璃では 1 例しか見られず、分析に耐えうる用例が得られない（金水 2001 も参照）。また澤田（2017）では、近松の世話物 14 編に加え、この時期の口語資料となる噺本や浮世草子等も調査しているが、アガル・ヤガルを含め、近松の 1 例のみとしている⁽⁶⁾。卑罵用法のアガルを含

表 2 調査資料の概略

時代	ジャンル	具体的な作品
近世	噺本	無事志有意
	洒落本	CHJ 所収の江戸板の洒落本 10 作品に「遊子方言・辰巳之園・傾城買四十八手」を加えた 13 作品
	滑稽本	東海道中膝栗毛・浮世床・浮世風呂・花暦八笑人
	人情本	春色梅児誉美・春色辰巳園
明治大正	初期口語 (CHJ)	CHJ 所収の安愚楽鍋・春秋雑誌会話篇の 2 作品
	落語速記	落語速記 10 作品
	SP 落語 (CHJ)	CHJ 所収の江戸落語のみ
	雑誌 (CHJ)	CHJ 所収の 7 誌
	小説 (CHJ)	CHJ 所収の 21 作品の収録部分
	新聞 (CHJ)	CHJ 所収の読売新聞

め、ヤガルが文献上に現れてくるのは主に近世後期以降と考えられるため、主に近世後期以降の口語資料を調査した。調査には「日本語歴史コーパス」(以下、「CHJ」と表記)も用いた。なお、ヤガルについては、資料の絶対量の面から、上方語よりも江戸語での出現数が多く、観察しやすいという点から本稿では、主に近世後期以降の江戸・東京語資料を対象としている。対象は、作品における会話部分のみである⁽⁷⁾。表 2 に調査に用いた資料のジャンル等について簡略に示しておく(資料の詳細は稿末の調査資料一覧に示した)。なお、近代以降の CHJ には非コアのデータも含まれており、不適切な例も含まれるため、そのような用例は目視で除外した。文意がわかりにくいものや聞き取り等が困難となっている例については保留として分類している。

4 調査結果

本節では、調査の結果について述べる。本調査における用例の数値については、稿末に【別表 1】という形で示した。表には、全体像を示すという目的から、テ形補助動詞やヴォイスの助動詞等が付いた例も計上したものを示している。以下では、まず近世後期以前の状況について簡単に述べ、その後、調査結果について述べていくことにする。

4.1 近世後期以前

近世後期以前の状況について簡単にまとめておく。近世前期には先に述べたように用例数がほとんど得られず、代表的な上方語の口語資料である近松の世話物浄瑠璃においても、次の(4)の 1 例しか見られない。(4)の「はたえる」はここで

は「ふざける」に該当するものであるため、意図的な動詞と判断できそうな例である。

- (4) ヤイかしましいあたり隣もあるぞかし。よつぼどにほたえあがれ

(世話物浄瑠璃・「女殺油地獄」[1721 初演]: 232)

また澤田 (2017) では、時代物の歌舞伎・浄瑠璃や浮世草子なども対象に調査し、卑罵用法のアガルの例を挙げている。挙げられている例を見ると「言う (ぬかす)・そしる」などの言語活動動詞や、「失せる・行く・出る」などの移動動詞、「黙る」など、前接動詞に主語の意図性が認められるものである。

- (5) a. 難波の五郎眼をむき出し。ホ、あたゝかな事をぬかし上る

(浮世草子・鬼一法眼虎の巻 [1733 年刊])

- b. 「(略) マアとつ付におる宅内め。身が前へ出あがらふ。」

(浄瑠璃 (時代物)・菅原伝授手習鑑 [1746 年初演])

- c. ^{官藏}「黙りあがれ。二色の宝を盗だとは、何を」

(歌舞伎脚本 (時代世話物)・幼稚子敵討 [1753 年初演])

(澤田 2017: 160 の挙例 (36 - 38))

断言はできないが、この時期の卑罵用法としてのアガルに前接するのは意図性のある動詞に限られていた可能性が高く、基本的に $\alpha 1$ だったと考えられる。

4.2 近世後期

次に近世後期の状況について見る。この時期に現れたすべてのアガル・ヤガル (テ形等も含む) の語形はアガルが 4 例、ヤアガルが 268 例、ヤガルが 19 例と、ヤアガルの使用が多い (澤田 2017 も参照)。一見、アガルからヤアガル・ヤガルに交替しているように見える。ただし、表記の問題等も関わるため、語形の変化の詳細な過程は不明である。

この時期の用例は (6) に示すように主に $\alpha 1$ が多く、澤田 (2017) が基本的に A 型のみと述べていた点に合致する。

- (6) a. 客あごたたたきやあがると鼻つばしらちりけへたたき出すぞ

(52- 洒落 1769_01001,82100 「郭中奇譚」[1769])

- b. わゐら狂ふて斗ゐずと、座敷へうせあがらないか。

(洒落本「遊子方言」[1770]: 48)

しかし、次に見るように、非意図的な動詞が前接する $\alpha 2$ と分類できる例も見られる。 $\alpha 2$ の例としては次のよう例が挙げられる。

- (7) a. よおらがのままいばん本所からここ迄くるのだからはやくへるぞ客いや
下駄でおもひ出したあのお六めに兵藏めが下駄で首だけほれやがつた

(52- 洒落 1769_01001,81690 「郭中奇譚」[1769])

- b. これゑ。うぬがいくらきんだつても。おれに齒がたつもんけへ。いけもしねへでひねつこびやあがつた。此唐なすのとなり野郎め。

(52- 洒落 1771_01004,57000 「俠者方言」[1771])

(7) に示した例は前接動詞に意図性を認めることは難しいものと考えられる。(7a) は「兵藏め」と接辞が付いており、(7b) は主語が二人称であるため、 $\alpha 2$ と分類した。このように前接する動詞は意図的なものに限られているわけではない。

また $\alpha 2 \cdot \beta 1$ に分類したものもある。次の(8a) は、藤兵衛がお由とお蝶を相手に、お阿が死んだことを述べている場面であり、(8b) は蔭八と此糸が第三者の鬼兵衛に対して陰口を述べる場面である。ただし、文脈上、主語に対する嫌悪も認められる箇所であり、 $\alpha 2$ とも考えられるものである。

- (8) a. イヤあんまりごた／＼してはなすのを忘れたが、今こゝへ来るまへにお阿が所へ寄て、金は此間渡したが、お蝶ぼうの證文が見えねへといふから、仮請取を取て隣の人が請人で、今日までに證文を尋ねて帰すやくそくだから、それを取に寄たら、お阿ばアさんがの、毒魚にあたつて死んだといふ所へ行合したが、イヤお阿が毒魚で死ぬと云は、とんだ落し咄だ。あんなによくばりやアがつたが、死んで見りやアいくちはねへぜ。

(人情本・「春色梅児誉美」[1832 - 1833] : 204)

- b. [※鬼兵衛の台詞] まづ今日はこのまゝおまへにあづけます、トさにもく／＼しく言はなして、奥に入りたる跡見送り、彼蔭八が此糸と顔見合せて小聲になり ^{かげ}「へエ親方振やアがつて、大造なつらアしやアがる。

(人情本・「春色梅児誉美」[1832 - 1833] : 226)

4.3 近代 (明治・大正期)

最後に近代以降の状況について述べていく。近代の語形については、ヤガルもしくはヤアガルという形で出現し、アガルは 1 例とほとんど出現しない。この時期には語形としてヤガルが定着していたかと思われる。

この時期もタイプとしては $\alpha 1$ が多くを占めるが、 $\alpha 2$ 、または $\alpha 2 \cdot \beta 1$ も確認ができる。ここでは $\alpha 2 \cdot \beta 1$ の例に着目したい。

- (9) a. ○「オイ馬士冗談ぢやアねえ、馬に叱言を云ふなア止して呉れ、其の度に馬の上でビクビクする、口汚く叱言を云ふなよ。馬士「叱言を云ふ訳では

ねえけども、[※馬ガ] 此の節増長ばかりしやアがつて」○「馬が増長するかな」

(柳家小さん「猿丸大夫」[1924]: 411)

- b. [※一人で見つからないように唐茄子を売る練習をしている]『エー唐茄子や………』アツ誰か彼所に居やがアる、日向に出て此方を見て居る所を見ると、扱は見附つたかな。

(柳家小さん「唐茄子屋」[1924]: 434)

(9a) は馬士が客に自身の馬が増長することを述べる場面である。(9b) は唐茄子を売る練習をしていた際に人がいることに気づいた際の発話である。これらは、前接する動詞が意図的な行為とは考えにくいものである。(9) はともに三人称であり、卑語的な人称表現等も使用がないため、 $\alpha 2 \cdot \beta 1$ とした。(9a) は、現代語を基に考えると、「馬が生意気にも／(?) よくも増長しやがる」のように「よくも」や「生意気にも」のような副詞の使用が、許容されうると見られる(ただし「よくも」はやや許容しにくい)。したがって、(9a) は $\alpha 2$ である可能性もある。しかし、(9b) のような場合、「?? あっ、誰かあそこに[生意気にも／よくも] 居やがる」となり、かなり許容度が下がると考えられる。もちろん、現代語の感覚のため、これをもって $\alpha 2$ ではないと断言はできないが、主語を見下げているとはやや解釈しにくい例である。このように有情物主語だが、主語下位待遇の機能が希薄化しているような例が見られる。

近代の大きな特徴として、 $\beta 2$ の使用例が見られるようになるという点も挙げられる。調査資料に見られた $\beta 2$ の用例は全部で 3 例であるため、以下にすべて挙げておく。

- (10) a. [※塗箱の中に入っていた小さな玉を見て]『何て光りやがるんだ。…此奴が上田様の御代替りに無くてならぬ玉なのか。(…)

(60M 太陽 1925_02043,40720 「歴史情話 息のぬぐみ『第一回』」[1925])

- b. 外は小糠雨が降て居ます。(…)『いつまで降りやがるんだらう』彼は恚う言つて煙管を置くと共に舌打しました。

(60M 婦俱 1925_06166,22920 「幸福物語」[1925])

- c. 『又火事でも地震でもあればいい』『焼打事件でも起りやがれ』など仲々物騒なのが出て来る。

(60M 太陽 1925_11065,104650 「本所深川」[1925])

(10) に示した用例はいずれも非有情物主語である。用例数が 3 例と少ないが、それ以前には見られなかった使用である。ただし、全体の用例数に比べ、少数のため、偶然の可能性も考えられる。そこで、補助的に全文検索システムの『ひまわり』を

用い「『青空文庫』パッケージ」を検索したところ、次の(11)に示すように同時期の例やそれ以降にも $\beta 2$ の使用を確認することができた。したがって、明治・大正以降にはそれまで見られなかった $\beta 2$ の使用が現れるようになったといえるだろう。

(11) a. 眼鏡「あゝ、痛え(眼をこする)煤がはひりやがつた。こいつはいかん。

とても痛い。あいたた た……(間) すみませんが、ちよつと、見て下さい。

繻帯「(見ながら) 見るのはいゝが、此の明りぢや、君……。…」

(岸田国士「命を弄ぶ男ふたり(一幕)」『新小説』[1925])

b. 窓硝子ごしに覗いて見て、「よく、降りやがる」そして、濡れたレインコートをまたひっかけた。

(矢田津世子「痴女抄録」『改造』[1939])

4.4 小結

これまでのヤガルの記述について簡単にまとめておく。近世後期以前は用例数が極めて少ない。その中で用例が得られる卑罵用法のアガルを見ると、前接動詞は言語活動動詞や、移動動詞、「黙る」など意図性のある動詞と認められそうなものである。断言はできないものの、卑罵用法のアガルは $\alpha 1$ の用法に限定されていた可能性がある。

近世後期になると、ヤアガルという語形で用例が多く見られるようになる。タイプ別にみると、 $\alpha 1$ のみでなく、 $\alpha 2$ の使用も見られた。 $\alpha 2 \cdot \beta 1$ としたものもあるが、 $\alpha 2$ とも考えられそうなものであり、 β タイプの確例となるものは確認できない。

近代に入ると、 $\alpha 1$ と $\alpha 2$ の使用例も引き続き見られるが、 $\alpha 2 \cdot \beta 1$ の中でも(9b)のような主語下位待遇が希薄化しているような例が見られる。またそれまで見られなかった $\beta 2$ の使用が確認でき、調査対象とした時代以降にも $\beta 2$ が確認できる。

以上、ヤガルは歴史的に α タイプの用法から β タイプの用法を新しく拡張させてきたといえるだろう。

5 変化の過程について

最後に4節で記述してきた変化の過程について考察したい。まず、近世後期以前は、用例数が少ないため、断言はできないが、 $\alpha 1$ タイプに限定されていたと見られる。アガルの卑語的意味は、他者の行き過ぎた行為に対する話者の卑語的感情が焼き付いたことによって、生じたものであった。近世後期以前のアガルはこの「他者の行き過ぎた行為」という性質を保持しているため、話者の意図的な行為である $\alpha 1$

に限定されていたと考えられる。

近世後期には形態として、ヤアガル・ヤガルが非常に多くなり、アガルはほとんど確認できなくなる。またタイプの面では、 $\alpha 1$ だけでなく、 $\alpha 2$ の使用も見られるようになる。 $\alpha 2$ が見られるということは、前接動詞に、非意図的な動詞も取ることができるようになったことを示しており、前接する動詞の範囲が拡大していることになる。またヤ（ア）ガルはそれ単独で用いることができないため、アガルからヤ（ア）ガルへの変化は自由形態素から拘束形態素という変化である。このような使用範囲の拡大や、自由形態素から拘束形態素への変化は文法化でよく見られる現象である。ただし、この時期のヤアガル・ヤガルは他者への見下げ・罵りを表す「主語下位待遇」という機能を持っており、主語は有情物という意味面での制約が存在したと考えられる。したがって非情物を主語とするヤガルの例は見られないものと解釈したい。

その後、近代では、 $\alpha 2 \cdot \beta 1$ の中で主語下位待遇の機能が希薄化しているような例が見られた。主語下位待遇の機能が希薄化し、それまで α タイプに含意されていた「事態に対する悪感情を示す」という機能が前面化することによって、 β タイプの用法が新しく生じてきたと考えられる⁽⁸⁾。 β タイプは「主語下位待遇」という機能を持たないため、非情物を主語とする $\beta 2$ の使用も見られるようになる。 β タイプの出現には、ヤガルが前接動詞を拡張させたという点と、主語下位待遇という機能が希薄化し、事態に対する悪感情という機能が前面化したという点が大きくかかわっているといえよう。

6 まとめ

本稿では、以下のことを述べた。

- A) 卑罵用法のヤガル・アガルのタイプについて、近世後期以前についてはアガルという形で、 $\alpha 1$ に限定されていたが、近世後期の江戸語では $\alpha 2$ タイプの使用も見られるようになる。 β タイプの確例と見られる例はこの時期にまだ見られず、主語下位待遇の機能を持つ用法のみであった。近代になると α タイプに加え、 $\alpha 2 \cdot \beta 1$ の中でも、主語下位待遇の機能を希薄化させているような例や、 $\beta 2$ の使用も観察される。このことからヤガルは歴史的に主語下位待遇の用法から事態に対する悪感情を示す用法を拡張させてきた。
- B) β タイプへの用法の拡張は、近世後期に前接する動詞の範囲が意図性のある動詞から非意図性の動詞にも拡大したことと、近代に主語下位待遇という機能が希薄化し、それまで含意されていた「事態に対する悪感情」が前面化したこと

によって生じた。

今後の課題として、他の卑罵語でもヤガルと同じように事態に対する悪感情を示す用法が派生しているのか検証することが挙げられる。

注

- (1) このような例として次のような例が挙げられている。
 - (i) 「(…) 打杭うち立てはべりし所に立てはべりし。男ども、『所こそ多かれ、ここにしも』と言ひはべりしを、やがてただ言ひに言ひあがりて、車のとこしばりをなむ切りてはべりける。(…)
- (2) ヤガルの卑語化については、金水(2001)で別の説が考えられている。金水(2001)では、尊敬語としての「上がる」を補助動詞化したものが敬意減減の法則によって卑語的意味に転じたという仮説が示されているが、金水(2001)でも述べられているように証拠となる用例が得られていないため、仮説にとどまる。このほか松尾(1936)や吉田(1971)でも卑語化の要因が示されているが、実証的ではない。そのため、卑語化については澤田(2017)の説に従っておく。
- (3) 澤田(2017)はA型とB型の区別が方言でも適用できるという点についても述べている。出雲方言のヤガル相当の卑罵語であるサガルにはA型の用法のみがあり、B型の用法は存在しないという点からA型・B型の区別の妥当性を主張する。また、近畿方言のヨルが雨などに対して用いられるという中井(2002)の記述を引用し、B型の用法を持つ可能性について言及するが、この点は今後の課題としている。
- (4) 無主語文の例として澤田(2017:153)では「ちくしょう。暑くなってきやがったな。」などを挙げている。
- (5) テ形補助動詞は、「テイル・テアル・テオク・テシマウ・テヤル・テモラウ・テクレル・テイク・テクル・テミル・テミセル」とその待遇形式である。
- (6) 澤田(2017)では、近松以外に近世前期の口語資料となる断本68編、西鶴の浮世草子6編を調査している。
- (7) コーパスの用例は、会話のタグが付与されるものに限った。また語彙素のキーを「上がる」にし、同様の資料の調査を行ったがコーパスの検索では、卑罵用法としてのアガルは以下に示す1例のみであった。
 - (ii) 人のとつた鼠を皆んな取り上げやがって交番へ持つて行きあがる。
(60N 吾輩1905_11001,81410 「吾輩は猫である」[1905])また近代以降の資料の多くは標準語的なものが多いが、関西出身の人物による作品等や、標準語以外のスタイルで話す話者の発話も含まれている可能性がある。
- (8) この点は小柳(2018)の「含意の表意化」に関する議論を参考にした。

参考・引用文献

- 菊地康人(1997)『敬語』(講談社学術文庫)講談社(1994年に角川書店より出版されたものの再刊)
- 金水敏(2001)「文文化と意味―「～おる(よる)論のために―」『国文学 解釈と教材の研究』46巻2号, pp.15-19, 學燈社

- 小柳智一（2018）『文法変化の研究』くろしお出版
- 澤田淳（2017）「日本語の卑罵語の歴史語用論的研究―「～やがる（あがる）の発達を中心に」」小野寺典子編『発話のはじめと終わり―語用論的調節のなされる場所―』, pp.145 - 186, ひつじ書房
- 中井精一（2002）「西日本言語域における畿内型待遇表現法の特質」『社会言語科学』第 5 卷第 1 号, pp.42 - 55, 社会言語科学会
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版
- 松尾捨次郎（1936）『国語法論攷』文学社
- 山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究 近世編』武蔵野書院
- 湯澤幸吉郎（1957）『増訂 江戸言葉の研究』明治書院（使用したのは明治書院から1981年に再版された「増訂二版」を使用）
- 吉田金彦（1971）『現代語助動詞の史的研究』明治書院

参考・引用テキスト

用例の収集には以下のデータベース・コーパス等を用いた。

国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2022.3, 中納言バージョン 2.5.2）<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>（2022年 8 月 22 日確認）。以下に今回の調査の検索条件式（短単位）を示す。

《近世期》

後方共起：語彙素 = “やがる” ON 1 WORDS FROM キー IN (subcorpusName= “江戸 - 洒落本” AND core= “true” AND 部 = “江戸” AND 本文種別 = “会話”) WITH OPTIONS tglKugiri= “|” AND tglBunKugiri= “#” AND limitToMainText= “1” AND limitToSelfSentence= “1” AND tglWords= “20” AND unit= “1” AND encoding= “UTF-16LE” AND endOfLine= “CRLF”

《明治大正》

後方共起：語彙素 = “やがる” ON 1 WORDS FROM キー IN (subcorpusName= “明治・大正 - 雑誌” AND (core= “true” OR core= “false”) AND 本文種別 = “会話” OR subcorpusName= “明治・大正 - 初期口語” AND core= “false” AND 本文種別 = “会話” OR subcorpusName= “明治・大正 - 小説” AND (core= “true” OR core= “false”) AND 本文種別 = “会話” OR subcorpusName= “明治・大正 - 新聞” AND core= “false” AND 作品名 = “読売新聞” AND 本文種別 = “会話” OR subcorpusName= “明治・大正 - 落語 SP 盤” AND core= “true” AND 部 = “東京” AND 本文種別 = “会話”) WITH OPTIONS tglKugiri= “|” AND tglBunKugiri= “#” AND limitToMainText= “1” AND limitToSelfSentence= “1” AND tglWords= “20” AND unit= “1” AND encoding= “UTF-16LE” AND endOfLine= “CRLF”

国文学研究資料館「日本古典文学大系本文データベース」<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>（2022年 8 月 22 日確認）

全文検索システム『ひまわり』ver.1.7.2（国立国語研究所）<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?himawari>（2022年 9 月 27 日確認）

また『ひまわり』の「『青空文庫』パッケージ（20220401）」を使用した箇所がある。
<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?aozora>（2022年 9 月 27 日確認）

コーパス以外の作品について以下を参照（なお、『日本古典文学大系』（岩波書店）は【旧大系】、『新日本古典文学大系』（岩波書店）は【新大系】、『新編日本古典文学全集』（小学館）は【新編】とし、校注者・編者と刊年、書名のみを記す）。

〈近世後期〉《洒落本》遊子方言 [1770年頃]／傾城買四十八手 [1790]：中野三敏ほか校注・訳 (2000)『洒落本・滑稽本・人情本』【新編】／辰巳之園 [1770]：水野稔校注 (1958)『黄表紙・洒落本集』【旧大系】／《噺本》無事志有意 [1798か]：小高敏郎校注 (1966)『江戸笑話集』【旧大系】《滑稽本》東海道中膝栗毛 [1802－1814]：中村幸彦校注 (1995)『東海道中膝栗毛』【新編】／浮世風呂 [1809－1813]：神保五彌校注 (1989)『浮世風呂・戯場粋言幕の外・大千世界楽屋探』【新大系】／浮世床 [1813－1814]：中野三敏ほか校注・訳 (2000)『洒落本・滑稽本・人情本』【新編】／花暦八笑人 [1820－1849]：小池藤五郎校訂 (1942)『花暦八笑人』岩波書店《人情本》春色梅児誉美 [1832－1833]／春色辰巳園 [1833－1835]：中村幸彦校注 (1962)『春色梅児誉美』【旧大系】

〈明治大正〉《落語速記》嵯峨康隆ほか (1980・1981)『口演速記明治大正落語集成』（講談社）を使用。以下に、調査した演目を「演者、演目名、初出雑誌名、初出年、口演速記明治大正落語集成」の収録巻数」の順に記した。橘家円喬「鼻無し」「狸」：『百花園』[1895] 3巻／柳家小さん「無筆」「粗忽長屋」：『百花園』[1895] 3巻／禽語楼小さん「親の無筆」：『百花園』[1895] 3巻／三遊亭金馬「自動車の布団」：『文芸倶楽部』[1921] 7巻／古今亭今輔「雷飛行」：『文芸倶楽部』[1921] 7巻／柳家つばめ「ちりとてちん」：『文芸倶楽部』[1923] 7巻／柳家小さん「猿丸太夫」「唐茄子屋」：『柳家小さん十八番』[1924] 7巻

〈その他〉女殺油地獄 [1721]：鳥越文蔵ほか校注・訳 (1997)『近松門左衛門集①』【新編】／落窪物語 [10C末]：三谷栄一ほか校注・訳『落窪物語・堤中納言物語』【新編】／《青空文庫パッケージ》岸田国土「命を弄ぶ男ふたり」[1925]・矢田津世子「痴女抄録」[1939]

なお、個々の用例の引用については、読みやすさのため、句点や、カギかっこの追加など本文を改めた箇所がある。会話等の中略は(…)で示し、[※]としているものは稿者による補足である。

付記

本稿は、令和4年大阪大学国語国文学会（2022年1月8日、zoom開催）での口頭発表の一部を基にしたものである。発表席上、またその他で多くの方々よりご意見・ご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

別表 1 アガル・ヤガルのタイプ分けの使用数

		$\alpha 1$	$\alpha 2$	$\alpha 2 \cdot \beta 1$	$\beta 2$	テ形補	ヴォイス	保留	全数
近世	嘶本	7	0	0	0	0	0	0	7
	洒落本	32	3	0	0	4	1	0	40
	滑稽本	195	4	0	0	25	19	1	244
	人情	11	0	2	0	4	1	1	19
近代	初期口語	9	1	2	0	2	1	0	15
	落語速記	40	2	4	0	29	0	0	75
	SP 落語	48	0	5	0	59	0	0	112
	雑誌	113	7	7	3	73	8	0	211
	小説	10	0	0	0	10	0	0	20
	新聞	2	0	0	0	0	0	0	2

(にしたに・りゅうじ 本学大学院博士後期課程)